第 20 回研究会より

参加者　12 人+森田智幸（山形大学講師）先生

会場：雪の里情報館

冷たい雨の中ですが、今年度最初の授業研究会は、１２名という大人数での開催となりました。本当にありがとうございました。森田先生も参加してくれました。

さらに、本研究会初参加の高久さん、佐藤（祐）さん、永澤さんありがとうございました。

さらにさらに、初参加の佐藤（祐）さんが、昨日のご自分の中学２年英語の授業を撮影してくださり、それを持ち込んでの授業研究会でした。

本当に、佐藤さんの意欲的な研究への姿勢は、他の参加者の方々に大いに刺激になったと思います。

中学２年英語　『be going to ～』

授業の流れ

教科書のフィンランドの旅行についてのグループ４人での調べ学習

その後、ハワイ、イギリス、オーストラリア、アメリカ、スペイン、

イタリア、バリの旅行パンフレット１冊を各グループに渡して、それぞれの旅行計画をみて、英語に直すという課題へ

【主な議論 】

K さん : 今日のビデオでは、４人グループの中で、課題を解決していく様子が見られた。自分の教室ではグループ内で解決できなくて、他のグループに立ち歩いていく姿がみられる。どう思うか。

→知識好奇心からの行動なら、自分なら認めたい。立ち歩きによって、情報がさらに交流していくのではないか。

→自分は、４人の中で課題解決をするようにしたい。だから立ち歩きは認めない。立ち歩きをするということは、課題のレベルに問題があるのではないかと考える。

→教師のひとつのルールに背く行為であるならば、許さないのが大切。ある程度、教師のコントロールが聞くなかで学び合いは安定していく。

森田先生：立ち歩きの場面でみられるのは、学び合いの丁寧さが雑になってしまった場面で多い。言葉でいうと、学び合いに“ひび”や“亀裂”がはいったときだ。むしろ、その場面こそが、教師の判断をするときだろう。立ち歩きをしたくなるのは、何が問題になっているのか。何が問題になっているのかというときほど、全体に戻すときかもしれない。知的好奇心という言葉があったが、知的好奇心とは戻るときであり、進むときではない。グループの代表者を他のグループに派遣するといやり方には、学び合いとは、どんどん進ませることという文化がある。

むしろ、立ち歩きがはじまるときとは、授業者の貴重な判断を求められているときで、教師が学びを戻し、立ち止まって考えさせるときだろう。そういう意味で、簡単に立ち歩きを認めるのはもったいない。

また、どうしてもグループの活動は、やり切らせようとすることが多い。やり切る前に途中で全体に共有させたりしたい。

教師は、全体が本番で、グループは補助・練習という感覚がありがち。

子どもひとりでやるときこそが、本番だろう。

T さん : 教師の出について考えたい。本授業では、一部「先生！」と言って、先生に助けをもとめる生徒がいた。どこまで教師は対応したらよいのか。

→授業者のゆうきさん : あるグループは『乗り継ぎ』という英訳で悩んでいた。そのようなときは支援していた。

→「先生！」と助けを求めたグループに、先生が細やかに対応していたが、そのグループは、再び「先生！」を始めている。リピータになっていた。「先生！」と求めないグループは最後までグループ内で解決していた。

→授業者が自分からグループに入ったときと、呼ばれて入ったときと２通りの入り方があった。

→確かに、授業者が進んで入ったときは、生徒と同じ目線にしゃがんで、話をつなごうという意識が見られたが、呼ばれた時は、いっしょに辞書を片手に説明者になっていた。まるで電子辞書のように、わからないとすぐに教えてくれる便利な道具のような立場になったように感じる。

→ある人は、「ぼくは冷たいんですよ」と言っていたが、呼ばれても

教えない。そうすると生徒はある意味あきらめるんじゃないか。自分たちでやるしかないと。

S さん : 最初の教科書の課題をやっているときは、一部学びから離れている男子生徒が見られたが、パンフレットのジャンプの課題になって、表情が一変した。
→辞書を入れる箱が机の中央に立てて、バリケードになっていたが、ジャンプの課題になると、そのバリケードが取り払われているのが印象的。
森田先生 : 男子 B のメガネが面白い。学びから離れているときはメガネをはずしていたし、学びに戻ってきたときはメガネをかけていた。メガネがスイッチになっているようだった。他の生徒が学びを進めていくと、メガネスイッチを入れて、真似をして書き始めている。教科書の課題とジャンプの課題があったが、最初の教科書の課題は、短いスパンのもの、パンフレットは、もっと長いスパンの感覚。賢い子どもは無謀なことにあまりチャレンジしないが、そうでない子どもほど、高いところからジャンプしてけがをする感じに似ている。挑戦することで、学びから離れていた子どもにとっては、スパンが長くなり無謀でも挑戦心がでてきた

課題について。課題づくりについてどう考えるのか。

→課題は、教科書の内容を離れて、日常的な事柄から迫れるものか考えている

→課題は作るものではなく降りてくるものと思っている。テレビや本などをみて、これを使えないか日常的にアンテナをはっている。

→ジャンプの課題は、なんだか『上に飛ぶ』という感覚が強く、しっくりこなかった。今日、森田先生が、無謀な飛び込みをする話をなされていたが、下に飛び降りるというイメージの課題（戻る）もあるのかもしれないと気づいた。

→自分は、ビルとビルの間を飛び跳ねるイメージ。挑戦に近いかもしれない。

→ジャンプの課題は、『距離』のイメージが強かった。できるだけ離れたもので、そこに近づくように学ばせる。でも、距離でなく『挑戦』の方がぴったりのイメージだと思う。 どんなドラゴンと戦わせるかを授業者は考える。その際、どんな武器を持たせるかが大切。時々武器を持たせずに戦わる授業をみることがあるが、あれは無謀。ドラゴンよりも、どんな武器を持たせるかを考えることが、ひょっとすると課題づくりよりも大切かもしれない。先ほども、佐藤先生が、単語の

つまずきを話していたが、次のクラスでは、そこの部分の武器をどう与えるか考えどころになる。

森田先生：武器の話がでていた。その場合どんな武器をもたせるかは大切だが、それ以上に問題だと感じているのは、「武器は簡単に持たせることができる」と教師が思っていることだ。
「さっき、説明したから武器を子どもは武器をもったはず」と考えることがある。
でも、子どもは、何かわからずに持っていること多い。課題に挑戦することで、武器の使い方がわかってくる。「これこんな風につかうのか」というように。ジャンプの課題によって、武器を始めて気づくこともある。
どんな武器をもたせるかだが、授業者は授業計画の段階で事前に考える。でも、授業になったら、考えたことを捨てる勇気も必要。計画に固執すると、子どもが見えなくなる。
知識には、オブの知識とアバウトの知識がある。オブの知識は、学問の概念が並んでいる感じ。アバウトの知識は、並んでいる概念をどう使うかと考える。社会学者は、授業を状況と参加者から分析するだろう。けれど心理学者は、話している内容から分析するだろう。

（授業計画はオブであっても、授業中はアバウト的にということか？）

最後に、問い方は、教師の教養レベルにかかってくる。だからこそ、教師はもっともっと専門的な教養を上げていく必要がある。

（高校の授業で、共同の学びが成功しやすいのは、高校教師の専門性にあるからだと思う）

佐藤先生の授業で、３時間休みなく議論をしました。とても充実しました。

その後も懇親会で引き続き議論もできました。

参加なされた方々ありがとうございました。 f

なんといっても、佐藤先生の素敵な授業ありがとうございました。

戻る